

高尾地域交流事業における学生・地域住民の相互支援活動の効果の検証

三上 ゆみ¹⁾*・松本 百合美¹⁾・岡 京子¹⁾・棚田 裕二¹⁾・合田 衣里¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部地域福祉学科

(2019年11月20日受理)

介護福祉士養成課程である地域福祉学科と高尾地域交流事業における8年間の相互支援活動が、学生・地域住民へどのような影響をもたらしたか、その効果を検証することを目的に、交流会会員・卒業生・学生に自己記入式質問調査を実施した。結果、会員は交流会に参加することで満足感は大きく2つに分けられ、①人のために何かができている、②自分自身のためになっているという満足感を得ていた他、学生は、多世代との交流を行うことで幅広い知識の習得と多世代とのコミュニケーション力を身に付けたと感じていた。しかし卒業生・学生は、同じ交流内容を経験しているにもかかわらず自己有用感は、現在の学生が低い結果であった。

(キーワード) 相互支援活動、地域住民、学生、交流事業、介護福祉士養成

はじめに

我が国では、高齢化や人口減少が進み、地域・家庭・職場という人々の生活領域における支え合いの基盤が弱まり、地域社会の存続への危機感が生まれこれらを乗り越えていくためには、社会保障や産業などの領域を超えてつながり、地域社会全体を支えていくことが、これまでも増して重要となっている。我が国は、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指す「地域共生社会」の実現を掲げている¹⁾。

これらを地域で支える専門職として介護福祉士は大きな役割が期待され、2019年度からの介護福祉士養成カリキュラム改正の中でも、地域の中での施設・在宅に関らず本人の望む生活を支えることが求められている。特に、①チームマネジメント能力を養うための教育内容の拡充が掲げられ、具体的に介護実践をマネジメントするために必要な組織の運営管理、人材の育成や活用などの人材管理、それらに必要なリーダーシップ・フォロワーシップなど、チーム運営の基本を理解させるために、領域「人間と社会」の時間数を30時間から60時間に拡充し、チームマネジメントの教育を含めるよう求めた。さらに、②対象者の生活を地域で支えるための実践力の向上が追加になった。具体的には地域共生社会の考え方や地域包括ケアシステムのしくみを理解し、その実現のための制度や施策を学ばせるため、「社会の理解」の教育内容に、地域共生社会が追加、「介護実習」には、地域における生活支援の実践を追加して、対象者の生活と地域との関わりや、地域での生活を支える施設・

機関の役割を理解し、地域における生活支援を実践的に学ぶ内容が求められることになった²⁾。

新見公立短期大学では、相互支援活動として2011年度より新見市高尾地区住民と交流事業を開始し、翌2012年度からは交流事業を授業科目に取り入れ、継続的な交流を8年間行ってきた。学生が地域から学ぶことはもちろん、地域住民も交流を通じて生きがいでいとどまらない教育力の向上など、相互に学習や刺激を受けてきた。この交流事業の体験が、現在介護福祉士として社会で活躍する卒業生への影響および、交流事業を継続してきた地域住民に与える影響や効果の検証を行うことは、学習効果の評価として意義があると考えた。今後、地域における介護福祉展開のリーダーとして地域生活を支える地域介護専門士養成の目指すべき役割、人材育成方法への基礎的資料を得ることにつなげたい。

1. 研究目的

新見公立短期大学の高尾地域交流事業における8年間の相互支援活動が、学生・地域住民へどのような影響をもたらしたか、その効果を検証し、今後地域で介護福祉を展開できる福祉人材となる目指すべき役割について、人材育成方法への示唆を得ることを目的とする。

2. 研究方法

1) 対象者:

・高尾学区新見公立短期大学学生との交流を考える会員30名

*連絡先: 三上ゆみ 新見公立大学健康科学部地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

・高尾交流事業参加経験のある住所の確認できた卒業生(2013～2018年度卒業生) 220人

・地域福祉学科2年生38人

2) 研究期間2019年6～8月

3) 方法:無記名による自記式質問紙による。

・会員:代表者を通じ、説明・了承を得られたのち配布後、期日を決めて個別封筒に厳封の上、直接大学へ郵送を依頼し回収した。

・卒業生:個別封筒に厳封の上、郵送調査

・学生:集合調査

4) 分析方法:得られたデータは記述統計を行い、性別、交流後の変化、生きがい感については、高齢者向け生きがい感スケール(近藤・鎌田2003)を援用した³⁾。6段階尺度である「非常に当てはまる」「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「かなり当てはまらない」「全く当てはまらない」で、順に6点から1点の得点を与えT検定を行った。参加満足度については5件法の「大変そう思う、まあまあそう思う、どちらともいえない、あまり思わない、全く思わない」(順序尺度)を用い、対象群別に一元配置分散分析を行った。以上の量的分析には、IBM SPSS Ststistics19を用いた。

5) 交流会実施状況

初回の2011年度は地域福祉学科の1.2年生を対象として希望者だけの交流を行い、2012～2013年度からは地域福祉学科1年生を対象に、科目の中に交流会を取り込み「基礎ゼミナール1・Ⅱ」の初年次教育を目的とした30コマ中11コマで実施した(表1)。2014年度より交流会を「生活文化演習」へ科目を移行しながらも38コマのうち11コマ、コミュニケーション能力を養うことと、地域生活を理解することを目的に交流を実施してきた。

表 1. 高尾交流会実施状況

	実施時期	内容
第1回		交流会に向けた準備
第2～3回	5～7月	交流会A 昔ながらのお菓子作り(相持ち) 交流会B 昔ながらのおもちゃ作り(水鉄砲)
第4回		発表に向けたまとめ
第5回	7月	まとめ発表会
第6～7回	10月 11月 12～2月 1月	交流会に向けた準備 交流会④ 学生企画 交流会⑥ 高尾文化祭 交流会⑦ 学生企画(認知症捜索訓練等) 交流会⑩ 高尾とんど祭り
第8回		発表に向けたまとめ
第9回	1月	発表に向けたまとめ
第10回	2月	まとめ発表会

*1学年を2～4グループに編成

3. 倫理的配慮

調査協力者には、調査の趣旨、方法(アンケート内容、要する時間)を十分に説明し、更に得られたデータは、統計

的に処理され個人情報は厳守される事、学術研究以外に使用しない旨を伝えた。また、回答をしない事への不利益は生じない事、調査票の同意項目へ同意の記載が得られたものを分析対象とした。また新見公立大学研究倫理審査委員会の承認を受け実施した(承認番号175)。

4. 結果

1) 回答者の属性

交流会会員(以下、会員と示す)、30人のうち回答者は15人(有効回答率50%)、卒業生220人のうち、返信と同意のあったもの31人(有効回答率14%)を分析対象とした。在学生は38人中35人(有効回答率92.1%)からの同意と回答を得た。回答のあった会員(の平均年齢は77.0±10.8歳で、性別は男性9人女性6人であり、うち10人が開始時の2012年度より参加しているもので、2016年度と2017年度から参加のものが2人ずつと、継続して参加したものが多かった。

卒業生の平均年齢は22.8±1.65歳となり、男性7人、女性24人で、現在介護福祉士として働くものが22人、働いていないものが3人、学生4人、他職種で勤務が2人だった。在学生の平均年齢は、19.4±0.5歳、男性11人、女性24人であった。

2) 交流会に参加した満足度

交流会に参加したことによる、自己評価や生きがい感の向上につながるなど、変化を明らかにするために、参加の項目ごとの満足度を5件法で回答を求め、さらに会員、卒業生、学生の3群間での比較を行った(表2)。

「交流会に参加して良かったですか」という項目に対しては、会員の、「大変そう思う」と「そう思う」の選択100%をはじめ卒業生や学生も90%を超える高い満足度であった。

卒業生と学生の2群間でばらつきが見られたのが、「地域の方(学生)に喜ばれたと思いますか」に対しては、卒業生は「大変そう思う」が58.6%と高い割合であったが、学生は「まあまあそう思う」75%が最も多く、そう思わない学生も見ればらつきが見られ有意に差が見られた(P<0.04)。

また、3群間で差が見られたのが、「参加して人の役に立ったと思いますか」については、学生の満足度は低く「どちらとも思わない」55.9%と役に立ったと感じているものが少なく、卒業生、学生間で有意差が見られ(P<0.00)、会員と学生間で有意差が見られた(P<0.03)。「参加して苦労したことがありますか」については会員の「まあまあそう思う」20%に対して、卒業生の「大変そう思う」「まあまあそう思う」の回答から有意な傾向が見られた(P<0.1)。

3) 交流会に参加した現在の变化

交流事業が、会員・卒業生・学生にどのような影響をもたらしたか、その効果を明かにするために、交流会に参加することで変化したと感ずることに対し、項目を設け複数回答で選択を求めた。会員自身の変わったと感ずる項目については、「知識が増えた」が最も多く67%、「健康に気を付けるようになった」53%、「会話をするようになった」「外出が増えた」が40%と、活動的な項目が高いことが伺えた(図1)。

更に、卒業生・学生の中で、比較を行ったところ、両群通して高かったものとして、「世代の違う人とのコミュニケーションがきるようになった」が卒業生55%、学生60%であり共に、他世代とのコミュニケーションへの変化を多く実感していた(図2)。「知識が増えた」では卒業生64%と学生37%で差が見られた(P<0.01)。次いで「準備の大切さに気付いた」が学生49%、卒業生38%であった。「興味を持つことが増えた」が卒業生19%、学生26%と学生のほうが興味につながっていた。「気配りに気付けるようになった」については学生9%に対して卒業生19%とこちらは卒業生の割合が高かった。

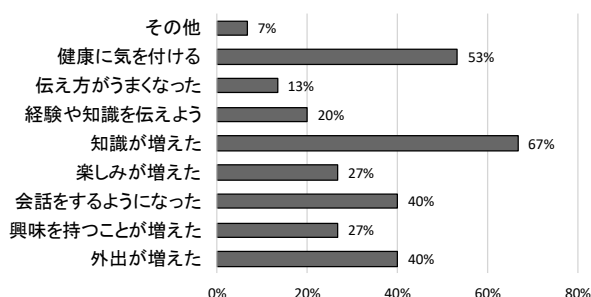


図1. 会員自身が変わったと感ずること(複数回答)

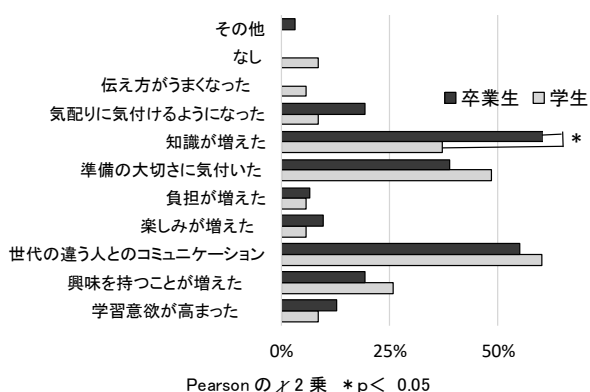


図2. 卒業生・学生の自身が変わったと感ずることの比較

4) 会員の生きがい感

地域住民と交流事業を行うことでの住民変化を「高齢者生きがい感」スケールを用いて性別ごとの比較を行った(表3)。

自己実現と意欲に分類される項目では、「私には家庭の内または外で役割がある」について、男性のほうが5.22と高い得点であり、女性より高い傾向が見られた(P<0.07)。生活充実感を見てみると男性は、「今日は何をして過ごそうか困ることがある」については2.44に対し、女性は1.40と男女間では男性のほうがそのように思っている得点が高いが高かった(P<0.04)。生きる意欲群については、「世の中がどうなるのか、もっと見ていきたいと思う」について男性は4.48と高く、対し女性は3.60と男性のほうが高かった(P<0.04)。全体の尺度を見ると交流会に参加している男性のほうが、女性に対して生きがい感尺度平均が高く生きがいを感じていた。

5. 考察

1) 地域住民に与える影響

交流事業において、学生は中山間地の地域風土を感じ、住民同士のつながりの大切さや地域を大切にす愛郷心などを学ぶことができる。また地域住民は、自己評価や生きがい感の向上につながるなど、変化がみられることが予想される。さらにこの交流事業を経験した学生たちが、介護福祉士として活躍する際への影響や、効果の検証を行うことを目的に研究を進めた。今回は、地域住民である会員は平均年齢が77歳と高齢者が多数を占め、8年以上継続して参加するものが多かった。会員の交流会に参加することでの満足感は大きく2つに分けられ①「人のために何かができている」という満足感と②「自身のためになっている」という満足感を得ていた。

自身の変化については、知識が増えたという項目が多く上げられたことから、学生との交流に向けて新しい情報を得ようとする姿勢や、学生と交流することで新しい情報を得る機会になっていたことがうかがえる。また、交流を機会に準備や、交流へ参加しようとする中で、交流会をもとに会話や、外出機会につながり活動的な変容につながった。

高齢者の生きがいの概念について野村は、「生きるために見出す意味や価値と、生きることに對する内省的で肯定的な感情の2つの属性からなる」と報告している⁴⁾。また、高齢者の生きがいを支える要因について青木は、「役割は役割意識や期待、役割や遂行を通して、高齢者を心理的、社会的に適応させアイデンティティを安定させるとともに、生きがい対象として役割を担い遂行することで生きる意味や張り合い、喜びや達成感、存在感など直接的に生きがい感情を喚起させる。」と述べている⁵⁾。

住民たちは自己実現や意欲といった生きがい感が高い値を示した。学生に対して指導的な立場を担うこともある会員たちにとって交流機会は、受け手としてではない、人生の指導者や地域の文化の伝授者の役割が求められる。会

表 2. 高尾交流会参加の満足度

		会員 (n=15)	卒業生 (n=31)	学生 (n=35)	F 値
良かった	大変そう思う	33.3% (5)	51.7% (15)	28.6% (10)	
	まあまあそう思う	66.7% (10)	41.4% (12)	65.7% (23)	
	どちらとも思わない	0% (0)	6.9% (2)	2.9% (1)	
	あまり思わない	0% (0)	0% (0)	2.9% (1)	
	全く思わない	0% (0)	0% (0)	0% (0)	
地域の方(学生)に喜ばれた	大変そう思う	26.7% (4)	58.6% (17)	16.7% (16)	3.66
	まあまあそう思う	53.3% (8)	31.0% (9)	75% (27)	
	どちらとも思わない	20% (3)	10.3% (3)	2.8% (1)	
	あまり思わない	0% (0)	0% (0)	2.8% (1)	
	全く思わない	0% (0)	0% (0)	2.8% (1)	
人の役に立った	大変そう思う	21.4% (3)	37.9% (11)	2.9% (1)	9.42
	まあまあそう思う	57.1% (8)	44.8% (13)	41.2% (14)	
	どちらとも思わない	21.4% (3)	13.8% (4)	55.9% (19)	
	あまり思わない	0% (0)	3.4% (1)	0% (0)	
	全く思わない	0% (0)	0% (0)	0% (0)	
交流の機会が増えた	大変そう思う	26.7% (4)	41.4% (12)	20% (7)	
	まあまあそう思う	53.3% (8)	31.0% (9)	48.6% (17)	
	どちらとも思わない	13.3% (2)	24.18% (7)	20% (7)	
	あまり思わない	6.7%	3.47% (1)	11.4% (4)	
	全く思わない	0% (0)	0% (0)	0% (0)	
自分のため	大変そう思う	40% (6)	37.9% (11)	20% (7)	
	まあまあそう思う	46.7% (7)	41.4% (12)	68.6% (24)	
	どちらとも思わない	13.3% (2)	13.8% (4)	11.4% (4)	
	あまり思わない	0% (0)	6.9% (2)	0% (0)	
	全く思わない	0% (0)	0% (0)	0% (0)	
やりがい	大変そう思う	33.3% (5)	42.9% (12)	7.5% (3)	
	まあまあそう思う	60% (9)	39.3% (11)	52.5% (21)	
	どちらとも思わない	6.7% (1)	10.7% (3)	15% (6)	
	あまり思わない	0% (0)	7.1% (2)	10% (4)	
	全く思わない	0% (0)	0% (0)	0% (0)	
苦労した	大変そう思う	0% (0)	14.3% (4)	13.8% (4)	2.63
	まあまあそう思う	20% (3)	35.8% (10)	51.7% (15)	
	どちらとも思わない	20% (3)	28.6% (8)	13.8% (4)	
	あまり思わない	53.3% (8)	21.4% (6)	20.9% (6)	
	全く思わない	6.7% (1)	0% (0)	0% (0)	

一元配置の分散分析およびTukey : **P<0.01 *P<0.05 †<0.1

表 3. 会員「生きがい感」の平均値と標準偏差

	男性		女性		
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
年齢	74.22	12.33	79.60	6.11 †	
自己実現と意欲	自分が向上したと思えることがある	4.44	0.73	3.60	0.89
	私には心のよりどころ、励みとするものがある	4.67	0.50	4.60	1.14
	私にはまだやりたいことがある	4.11	1.05	3.80	1.79
	私には家庭の内または外で役割がある	5.22	0.97	4.20	0.84 †
	他人から認められ評価されたと思えることがある	4.00	0.53	3.75	1.26
	尺度平均	4.49		3.99	
生活充実感	何もかもむなしと感じることがある○	2.67	1.12	2.20	1.30
	何のために生きているのかわからないと思う時がある○	2.11	0.93	2.00	0.71
	毎日なんとなく惰性で過ごしている○	3.67	1.00	3.00	1.41
	今の生活にはりあいを感じている	4.89	0.78	4.20	0.45 †
	今日は何をして過ごそうか困ることがある○	2.44	0.88	1.40	0.55 *
	尺度平均	4.40	0.94	4.72	0.88
生きる意欲	まだ死ぬわけにはいかないと考えている	5.11	0.93	4.40	2.07
	世の中がどうなるのか、もっと見ていきたいと思う	4.78	0.83	3.60	1.14 *
	尺度平均	4.94		4.00	
存在感	私は世の中や家族のためになることをしていると思う	4.22	0.44	3.80	0.84
	私がいなければだめだと思えることがある	3.56	0.53	3.40	2.30
	尺度平均	3.89		3.60	

○は逆転項目

†検定 *P<0.05 †<0.1

員は、どうやったら学生から話を引き出せるか、どのように伝えたら分かりやすいかという工夫を重ね、これらの結果を受けて学生は多くのことを学んできた。女性会員も、最初のころは、指導は男性と決めている姿も見られたが、次第に学生に対し直接的なコメントが見られるなど、補助者的な立場から教える役割の形成が見られ、人のためや、自身のためという高い満足感につながったと考える。

2) 学生及び卒業生に与える影響

学生及び卒業生への影響としては、「世代の違う人とのコミュニケーションがきくようになった」という多世代間のコミュニケーションに変化がみられていた。わが国の世帯数は4994万5千世帯で増加傾向にある一方、3世代世帯は全体の5.9%と30年前の約半数となり、世帯の少人数化やの核家族化は進んでいる⁶⁾。家族の少人数化は若者の多世代とのかかわり経験の少なさにも通じ、日常的に高齢者の暮らしを感じる機会がないために、高齢者に対するイメージを持ちにくいものがほとんどとなっている。多世代交流における若者と大学の役割について、須賀は「大学生は、幼年とは違い、人として生きることの意味を深めていくことのできる世代である。その一方で、「大人」の人生にもまだ踏み込んでいない。そういう立場で、多様な老いの姿の中に人生を感じ、感受性を高めていくことは、高齢者という存在を理解し、よりよい高齢社会を創っていくために必要なことである。」と述べている⁷⁾。これらのように、地域住民との交流によって学生や卒業生は多世代の価値観や人生経験への語りや話を聞いていく中で多様な人生観を受け入れるための心構えや高齢者のイメージができていくと考えられる。

一方、卒業生と学生への影響や効果を比較してみると、高齢者で高かった人のためと感じていることについては、卒業生は高く評価しているが学生は全体的に低い評価だった。さらに、人の役に立ったと感じたものは学生では思わないものが最も多く、同じ交流内容を体験しているにもかかわらず自己有用感、在学生在が低い結果であった。

わが国では、自己肯定感の低い子供・若者が増加していることが数多く報告されている^{8) 9)}。

相手を喜ばすことができるという感情が育つことは自己肯定感の基礎となる自己有用感を育てることでもある。対人援助職である介護福祉士や福祉職を目指すうえでも重要な意味を持ち、自己の自信につながり、「人との関わり」や積極的な学びの力をつけることができる。例えば「ありがとう」という言葉を交流後にうけたとき、学生は「期待に応えられてうれしい」と考える学生と「礼儀」とだけ感じる学生では大きな違いが生まれる。そういった、自己有用感が学生で下がってきている可能性もある。

また、私たちの教育のねらいが学生に十分伝わっていない可能性も示唆された。実際の交流会では「地域の皆さんが喜んで下さった」などの参加学生の感想は多くみられ

る。地域の人々と一緒に楽しんでいる様子や、地域の方からの感謝の言葉もいただいている。例えば竹を使った水鉄砲づくりを教わる活動がある。材料の竹を竹林から切り出し、分割し、会場にブルーシートを敷いて、作り方の解説書まで用意して下さる。こうしたことを、学生は自分たちのために苦勞をかけたと捉えるが、一方では、地域住民が準備に向けて力を合わせる住民間交流の促進、指導方法を考え、年々上手に指導して下さる教育力の向上などに役立っていることに気づかないのではないだろうか。ここに気づくことが交流事業を「相互支援事業」と位置付けている教育のねらいである。このねらいを年々変わりゆく学生たちに合わせて、うまくわかりやすく示し、実践後は学生自身にフィードバックすることを再度強化していく必要がある。

卒業生と学生の比較では、興味の幅の広がりや、気配りに対する変化では、卒業生のほうが高い割合であった。このことは、交流を通して経験したことが、社会や介護福祉士として働くうえで、活用していくことへつながり、学生の頃の経験がきっかけとなって感じる効果ではないかと考える。

交流会を通じての学生の変化として、参加してよかったと多くが感じており、特に他世代との交流を行うことで、高齢者が興味を持つ話題や、共通に盛り上がる話題など交流を繰り返しながら身に付けていったと考える。また、他県からの入学が多い大学において、他県の地域ごとに異なる文化に触れることや、自ら準備の大変さを感じ、苦勞したという割合からも参加する交流では、受動的な学修にとどまらず、能動的な学修となり深い学びとなったことがうかがえる。

今後、専門的な福祉職として活動を行ううえでの、高齢者の対象理解や自らの経験を広げ、地域の特徴を生かすという視点をもって地域福祉の展開をできる人材となることが望まれる。

参考文献

- 1) 厚生労働省：「地域共生社会」の実現に向けて、www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite (2019. 9・23アクセス)
- 2) 日本介護福祉士養成施設協会：介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究事業報告 介護福祉士養成課程 新カリキュラム教育方法の手引き, 2019.
- 3) 近藤勉 鎌田次郎：高齢者向け生きがい感スケール(K-1式)の作成および生きがいの定義, 社会福祉学, 43 (2), 93-101, 2003.
- 4) 野村千文：「高齢者の生きがい」の概念分析, 日本看護科学学会誌, 25 (5) 61-66, 2005.

- 5) 青木邦男：在宅高齢者の性格特性、生きがい感関連要因および生きがい間の関連性, 山口県立大学大学学術情報, 8, 7-17, 2015.
- 6) 厚生労働省：平成30年 国民生活基礎調査（平成28年）の結果からwww.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/20-21-h28.pdf (2019.11.11アクセス)
- 7) 須賀由紀子：地域コミュニティ形成における多世代交流の意義と大学の役割, 実践女子大学生生活科学部紀要第54, 7-16, 2017.
- 8) 国立青少年教育振興機構：高校生の生活と意識に関する調査報告書-日本・米国・中国・韓国の比較-www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/ (2019.9.24アクセス)
- 9) 日本青年の自己肯定感の低さと自己肯定感を高める教育の問題—ポジティブ思考・ネガティブ思考の類形から—：田中道弘, 自己心理学, 7, 11-22, 2017.